



Title	Interface humanities 07
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12966
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

主なシンポジウム・ワークショップ

- 2 月 11 日 ワークショップ「科学技術と倫理」
7 月 8 日 呉智英氏講演会(「イメージとしての<日本>」研究セミナー)
8 月 1 日～3 日 第4回全国高等学校校歴史教育研究会
9 月 7 日 若手研究者交流ワークショップ(イメージとしての日本)
10 月 15 日 COE 国際シンポジウム
10月27日～29日 第2回 COE-ARI ワークショップ

業績報告書

トランスナショナルリテリ研究グループ

「<日本>を超えて ―トランスナショナルリテリ研究4」

発行日: 2006 年 2 月 27 日 責任編集: 小泉潤二・栗本英世

「ポスト・ユートピアの民族誌 ―トランスナショナルリテリ研究5」

発行日: 2006 年 2 月 28 日 編集: 田沼幸子

イメージとしての<日本>グループ

「イメージとしての<日本> 05

―海外における日本のポピュラーカルチャー受容と日本研究の現在」

発行日: 2006 年 1 月 31 日 責任編集: 伊藤公雄

編集: 太田健二・吉澤弥生・山中千恵・Jessica Bauwens・伊藤遊

言語の接触と混交グループ

「言語の接触と混交―共生を拓く日本社会」

発行日: 2006 年 3 月 1 日 責任編集: 津田葵・真田信治

「言語の接触と混交―サハラにおける日本語の残存」

発行日: 2006 年 3 月 1 日 責任編集: 津田葵・真田信治

「言語の接触と混交―ブラジル日系社会言語調査報告」+ 1CD-Rom

発行日: 2006 年 3 月 1 日 責任編集: 工藤真由美

臨床と対話グループ

「『臨床と対話』研究グループ 2005 年度報告書

―第4回対話シンポジウム in 愛媛 報告書」

発行日: 2006 年 2 月 28 日 編集: 稲葉一人・和田直人・家高洋

「神戸―中越被災地交流フォーラム ―生活支援員の最前線から学びあう―」

発行日: 2006 年 2 月 28 日 編集: 神戸―中越被災地交流実行委員会

世界システムと海域アジア史グループ

「The Nobility: A Global Perspective Walter Dermal

Local Elites in Medieval China Aoki Atsushi」

発行日: 2005 年 12 月 Working Paper No.2

「世界システムと海域アジア交通 2005 年度報告書」

発行日: 2006 年 2 月 28 日 責任編集: 桃木至朗 編集: 佐藤貴保

<若手研究集合>

「インターフェイスの人文学―2005 年度<若手研究集合>報告書」

発行日: 2006 年 3 月 24 日 編集: <若手研究集合>報告書編集委員会

定例研究会等

グローバルヒストリー・セミナー／ワークショップ

4 月 20 日 Jan Luiten van Zanden (Utrecht University, The Netherlands)

<ワークショップ> 斎藤修 (一橋大学)

コメント: 山本千映 (関西大学) 尾高煌之助 (法政大学)

4 月 21 日 Jan Luiten van Zanden (Utrecht University, The Netherlands)

<セミナー> コメント: 斎藤修 (一橋大学)

久保亨 (信州大学) コメント: 秋田茂 (大阪大学)

5 月 20 日 Pierrick Pourchasse (University of Brest,)

<セミナー> コメント: 玉木俊明 (京都産業大学)

Wolfgang Schwentker (大阪大学)

コメント: 秋田茂 (大阪大学)

定例研究会等

「モダニズムと中東欧の藝術・文化 (MCE)」研究会

1 月 27 日 大津留厚 (神戸大学文学部・教授)

4 月 20 日 ゲイル・レヴィン (ニューヨーク市立大学・教授)

5 月 12 日 有木 宏二 (宇都宮美術館・学芸員)

6 月 16 日 ヤン・シーコラ (カレル大学哲学部日本学科・助教授)

6 月 23 日 早稲田みか (大阪外国語大学・教授)

8 月 6 日 ズィーヴァ・アミシャイ・マイセルズ (ヘブライ大学・教授)

トランスナショナルリテリ研究セミナー

1 月 27 日 出口 顯 (島根大学法文学部社会文化学科・教授)

2 月 10 日 ベン・アリ・イヤル (エルサレム・ヘブライ大学・教授)

2 月 24 日 内海博文 (大阪大学人間科学研究科・非常勤職員)

3 月 10 日 シャリニ・ランデリア (Universitat Zurich)

ママドゥ・ディアワラ (ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学)

6 月 16 日 三島憲一 (東京経済大学経済学部・教授)

6 月 26 日 アンナ・ツィン (カリフォルニア大学サンタクルース校・教授)

7 月 7 日 小泉潤二 (大阪大学人間科学研究科・教授)

公開講座「科学技術と倫理」

1 月 16 日 林真理 (工学院大学・助教授)

1 月 23 日 奥田太郎 (南山大学社会倫理研究所・第一種研究員)

1 月 30 日 吉川肇子 (慶應義塾大学商学部・助教授)

2 月 6 日 高津融男 (奈良県立大学・講師)

2 月 11 日 中山健夫 (京都大学・助教授) 土屋貴志 (大阪市立大学・助教授)

4 月 10 日 稲葉一人 (科学技術文明研究所・特別研究員)

4 月 17 日 中岡成文 (大阪大学・教授、大阪大学 CSCD・センター長)

4 月 24 日 中岡成文 (大阪大学・教授、大阪大学 CSCD・センター長)

5 月 8 日 武部 啓 (近畿大学遺伝カウンセラー養成課程・客員教授)

5 月 15 日 伊勢田哲治 (名古屋大学情報科学研究科・助教授)

5 月 29 日 松本三和夫 (東京大学大学院人文社会学系研究科・教授)

6 月 5 日 小林傳司 (大阪大学 CSCD・教授、副センター長)

6 月 12 日 蔵田伸雄 (北海道大学大学院文学研究科・助教授)

6 月 19 日 稲葉一人 (科学技術文明研究所・特別研究員)

6 月 26 日 柳川忠二 (東邦大学薬学部・教授)

7 月 3 日 平川秀幸 (大阪大学 CSCD・助教授)

7 月 10 日 林衛 (富山大学人間発達科学部・助教授)

7 月 24 日 松原洋子 (立命館大学大学院先端総合学術研究科・教授)

10 月 2 日 土屋貴志 (大阪市立大学大学院文学研究科・助教授)

10 月 16 日 加藤和久 (京都大学人文科学研究所、生命科学研究科(兼任)・助教授)

10 月 23 日 中山健夫 (京都大学大学院医学研究科・助教授)

10 月 30 日 八木絵香 (大阪大学 CSCD・特任講師)

海域アジア史研究会

1 月 14 日 桃木至朗 (COE 事業推進者) 山内晋次 (大阪大学文学部助手) 藤田

加代子 (COE 特任研究員) 蓮田隆志 (COE 特任研究員) ほか 21 名

4 月 22 日 村尾進 (天理大学)

4 月 22 日 川口洋平 (長崎県教育庁)

5 月 27 日 アダム・クルロ (コロンビア大学／東大史料編纂所)

6 月 24 日 栗山保之

中央アジア学フォーラム

4 月 8 日 斎藤茂雄 (大阪大学) 牛根靖裕 (立命館大学) 武田和哉 (奈良市教

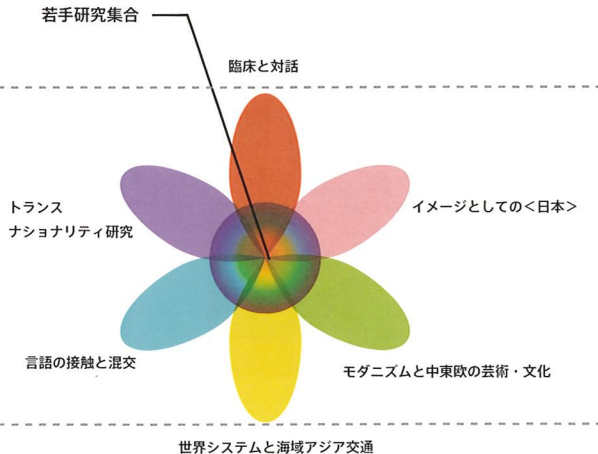
育委員会) 重森博・小野亜由美・中尾みのり (有限会社エムス)

9 月 30 日 赤木崇敏 (大阪大学) 鈴木桂 (東京大学) 森安孝夫 (大阪大学)

研究組織イメージ

こちらは、《インターフェイスの人文学》の組織を抽象的な図形であらわしました。

「臨床の知」と「横断の知」というふたつの軸の交差する次元に展開する、運動体のイメージですね。

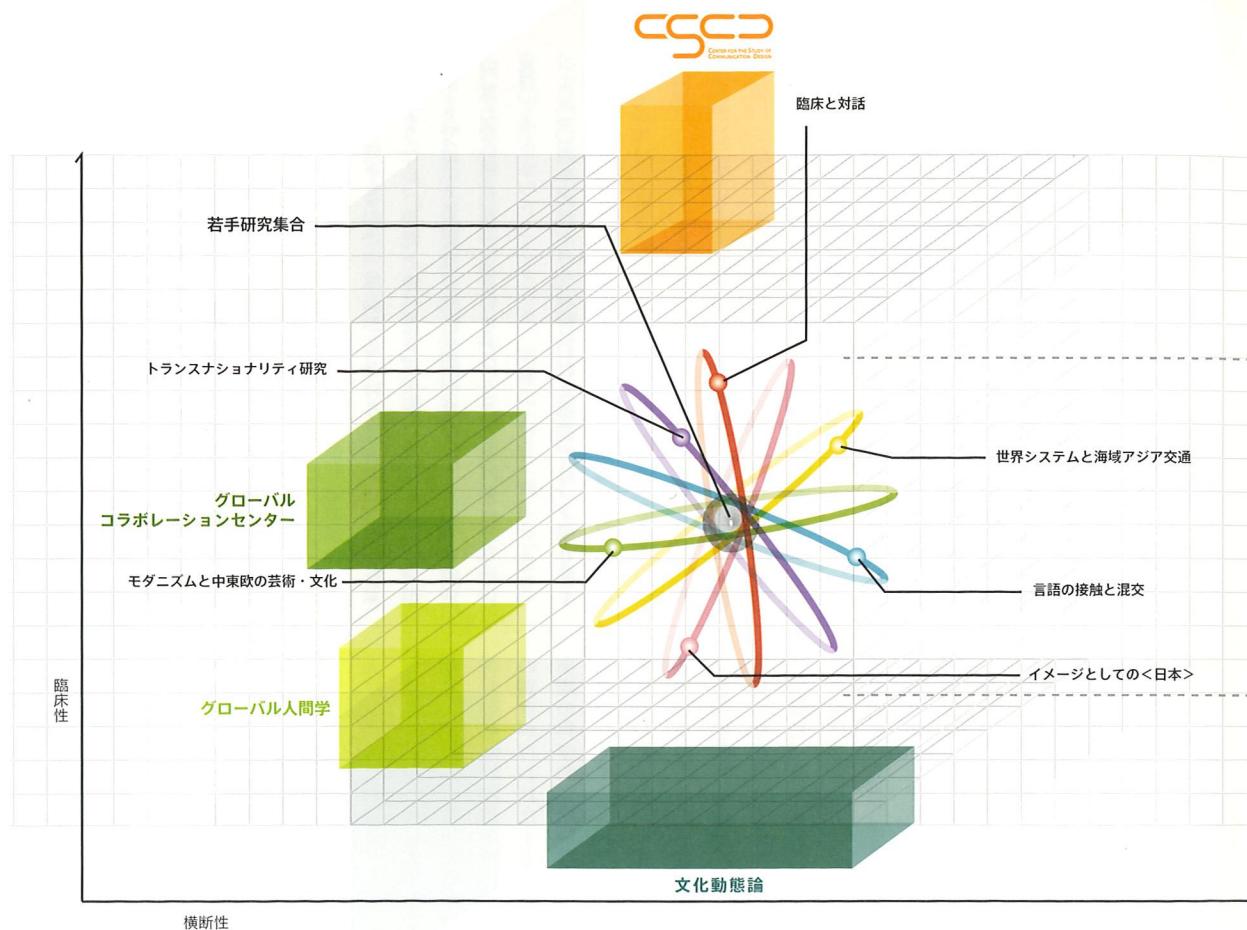


「臨床の知」は、科学技術・医療介護・災害支援・紛争調停といった具体的な場面で、専門家と非専門家とをつなぐコミュニケーションを探索する《臨床と対話》グループにリードされています。《言語の接触と混交》グループによる、地域社会や学校教育における多言語生活の現実をふまえた多文化共生のモデル構築、《イメージとしての日本》グループによる、ポピュラーカルチャーの情報発信とメディアテクノロジーとの相互作用的分析もまた、社会との密接な

連携のなかから新しい人文学の知を創出していくところです。《トランスナショナルイティ研究》グループが世界各地ですすめているフィールドワークとインタビューは、そもそも研究方法じたい臨床的といえます。《世界システムと海域アジア交通》グループがすすめる高等学校教員との双方向的な教育交流、《モダニズムと中東欧の芸術・文化》グループと美術館とのコラボレーションも、人文学の市民社会への接続を図るプロジェクトです。

「横断の知」では、文化的接触を「流動」「閉鎖」「脱領域化」という三つのフェイズでとらえるという動態論的な視座を共有しつつ、《トランスナショナルイティ研究》グループが国家や民族を超えるひとやモノや情報の循環のすがたとその意味を、《モダニズムと中東欧の芸術・文化》グループが、中東欧地域におけるモダニズム芸術の越境現象の実態を追求しています。《世界システムと海域アジア交通》グループが取り組む、主として海上交通によってネットワーク化されたアジア地域史の研究や、《イメージとしての日本》グループによる日本発ポピュラーカルチャーのワールドマーケットへの進出の分析もまた、国家や民族といった枠組ではとらえきれない現象の解明をめざしています。《言語の接触と混交》グループが調査をすすめてきたブラジル日系人社会や台湾にのこる日本語は、言語面からみた接触・越境現象の好例です。

人文学の研究活動をより反省的に討議するために、6つのモデル研究グループをさらに「横断」するかたちで、若手研究者を主体に組織されたのが、《研究集合》です。現実には個別のディシプリンによって細分化されている人文学に、市民社会との関係を再構築できるような、知的探求の原初的エネルギーを回復させる方法論を求めて、若手の熱心な取り組みがつついています。



《インターフェイスの人文学》の理念と研究は、大阪大学全体の幅広い理解と支援をうけ、具体的な組織編成に結実しつつあります。

「臨床の知」については、学内における研究教育拠点として「ミニニケーションデザインセンター」(CSCD)が設置され、当COEと緊密に連携しながら、科学と社会の新たな関係構築にむけた活動をはじめています。また、二〇〇七年十月の大阪外国語大学との統合にあわせ、人文学と社会との連携に実践的に取り組む新専攻「文化動態論」を文学研究科内に設置する準備がスタートしました。

また、「横断の知」については、同じく大阪外大との統合を機に、多文化間の接触や越境現象に取り組む新専攻「グローバル人間学」を人間科学研究科内に立ち上げ、さらに独立の研究教育組織「グローバルコラボレーションセンター」を設置する準備をすすめているところです。

これら新組織はいずれも、当COEの理念と活動を強く反映したもので、その成果を受け継いでいくことになります。



「二つの文化」と科学史の役割

山中浩司

アメリカの物理学者で科学史家でもあるジェラルド・ホルトンという学者が、一九九三年に書いた『科学と反科学』という本がある。この中で彼は、アメリカ合衆国の科学リテラシーは、「質問をされた成人の半分は、地球が太陽の周囲を周回するのに一年かかるということを知らない」というようなレベルだと述べたレポートに言及している。レポートでは「占星術は全然科学的ではない」という言明に同意しない人が四十%もいるということも問題になっている。

二〇〇四年にイギリスで行われた調査では、イギリス人の成人のうち多くは、クオークとDNAの違いがわからず、九十八%は、世界がクオークできていることを知らない」と報道された。

しかし、テッド・ニールドという人は、これについてこう書いている。「大衆が科学について無知だっことを心配しているのかい？元氣出せよ。そりゃほかのすべてのことについて無知なのと同じくらいなんだから。」

ちょうど同じ日にイギリスでは、歴史上の人物や事件についてのイギリス人の知識を問う調査を発表していた。インデペンデンス紙には次のような記事が掲載されていた。質問された成人のうち、三分の一にあたる人々は冷戦というものは存在しなかったと答えている。ウエルズの宇宙戦争が実際にあったとする人が六%もいた。アーサー王は実在したとする人は五十七%おり、これに対して、ヒトラーは実在しなかったとする人が十一%、ウインストン・チャー

チルというのは作り話の人物だとする人は九%、ムッソリーニに至っては、歴史上の実在人物と思わないと言う人が三十三%もいる。第二次世界大戦中の首相がウインストン・チャーチルではなく、ハロルド・ウィルソンだという人は五人に一人いる。

ご多分に漏れず日本でもこの種の調査がある。二〇〇一年に科学技術政策研究所が行った調査では、日本は科学的発見や新しい技術革新の利用に対する国民の関心が、同種の調査が行われた十五カ国中最低あたりに位置するらしい。実際の科学的知識を問う調査でも、日本は、イギリスや米国に比べてずいぶん下の方に位置している。科学は世界を良くしたかという質問に、五十三%の人が良くしたと答えているあたりは、かなり微妙な数字である。

無知を教育のせいにしたがる人は多く、科学者は歴史教科書の中で科学が扱われているページが極端に少ないことに抗議し、歴史家は教育の中での歴史の扱いに不満を言い、教育家は日常生活におけるハリウッドの影響力に不満を隠せないという具合である。昨今、スノーの『二つの文化』は、こうした文脈で取り上げられることが多いようだ。ご承知のように、もともとの趣旨は、文筆家でもあり科学者でもあるスノーが、二つの異質な文化相互の無理解にいらだつて書いたものだが、次第に科学者と無知な一般大衆という構図に置き換えられるようになった。

さて、この図式に乗って、一般人を啓蒙しようとする試みには枚挙にいとまがなく、また、少し図式を変えて、プ

山中浩司 (やまなか ひろし)

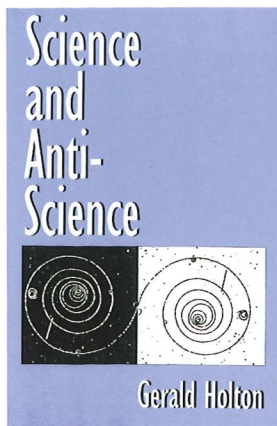
1959年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程退学(経済政策論)。大阪大学教養部専任講師を経て、現在、大阪大学大学院人間科学研究科助教授(医療社会史)。編著『視覚と近代』名古屋大学出版、共著『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房など。

ロフェッションナルとそのクライアントの関係のように、相互理解や対話を促進しようという試みもあるようだ。「科学史」にもそういう啓蒙的効用が求められている。これらは、それなりに意味があるのかもしれない。しかし、この種の改善の試みをまじめに検討する前に、「科学者」とか「専門家」とか「一般人」とか「大衆」とかいうような集団が、何かこれらの人々がもつ知識とか、価値観とか、能力とか、そういう内在的なもので仕切られているかのように考えることを多少とも疑う必要があるように思う。

社会学では、「役割」という考え方があり、「医師」「患者」「父親」「母親」「子供」「教師」「生徒」などは、一定の社会的役割の標識と考えられている。この場合、「医師」の役割を演じるための一定の要件というようなものはもちろんあるが、しかし、その要件は、医学知識が患者よりも豊富であるというような本質的なものであるとは限らない。場合によっては、「医師」に必要なのは、「医師」として振る舞う資質であるということもある。同様に「患者」側にも「患者」として振る舞う資質が求められる。この要件は、社会的に構成された相互の期待によって形成されるので、何らかの理由によって、「医師」や「患者」に期待されるものが変化すると、当事者はその対応に追われることになる。「占星術は全然科学的ではない」という言明に賛成しなかった米国の四十%の人たちは、科学的知識を欠いた人たちであるとは限らない。ダーウィンの進化論は間違っていると考える人が必ずしも無知な人でないのと同様である。ステイヴン・J・グールドは、二〇〇〇年を世紀の区切りと考える「無知な」大衆の意見に与したが、もちろん時間の区切りという問題について無知なわけではなかった。

いわゆる「科学史」は、正しい科学の知識を伝えるもの

としてはかなりおそまつなものである。「科学史家」はたいてい専門の科学者ではないし、専門の科学者はたいていの場合、科学史家としては間違っている。「科学史」は、何が本当の科学であるのか言うことはできないが、しかし、どんなものがこれまで「科学」と言われてきたのかということとは告げることができる。そのため、「科学史」に詳しくなればなるほど、「科学的」という形容詞に対して、よりシニカルになる。世界はクオークでできているかどうかは、科学史をいくら読んでも書いていない。その効用はむしろ、科学に対してもあるいは非科学に対してもより慎重になるということにあると思う。「科学者」役割を演じる方も、「大衆」役割を演じる方も、そのあたりも含めてうまく役柄をこなしてもらえればと願う次第である。



Gerald Holton, *Science and Anti-Science*,
Harvard University Press, 1993.

歴史学の刷新、または全体を見るところということ

桃木至朗

「世界システムと海域アジア交通班」を構成するグローバルヒストリー、海域アジア史、中央ユーラシア史など個々の領域については、これまでいろいろな形で紹介されてきたので、ここではそれらの全体を貫く「思想」の一端を、あらためて紹介したい。

歴史学の世界でも、従来の「日本人」が小学生のときから何千回となくたたき込まれてきた「小さいものを完全に究めてから大きいものに進む（Ⅱ小さいものを究めていない者は大きいものなど見てはいけない）」「自分の属する集団内の約束事を完全に身につけていない人間は、集団外のことなど考えてはいけない」という規範の影響はきわめて強い。これを相対化し、日本の歴史学がもつ世界一の緻密さを活かしながら、「もう一回り外から眺めてみよう」「可能なら全体を見よう」というのがわれわれの思想だ。サッカーにおける「ジーコ・ジャパンの失敗」と同様、日本人には所詮できないことを求めているという批判も出そうなこの思想は、研究における「横断」につながるだけではない。

全体を見る、それに基づいて批評・概論や教科書を書くという仕事を、「実証研究」より下ないし後に位置づけてきた従来の歴史学が、今日のナショナリズムによる歴史の利用、それよりさらに深刻な青年や人文・社会科学界の歴史離れなどに対して無力である点を反省し、世界的な研究成果を概論・教科書に直接反映させる方法を「全国高校歴史教育研究会」（計四回開催）などの形で検討するという、われわれの「臨床」活動にもつながっているのだ。

「横断」に戻って、われわれはたとえば「ここは日本だから歴史というのは日本史のことだ、その外に、あくまで参考のために『外国史』が存在する」という「日本史研究者の常識」を批判する。この「常識」が誇張でなく牢固として存在することのわかりやすい例は、「日本史業界」の論文タイトル（の付け方）に見られる。たとえば私が専門の十〜十四世紀ベトナム史について「中世の地域社会」という論文を学術誌に投稿したら、「ベトナム中世の地域社会」に直されるだろうが、日本史の論文に限って、日本史専門でなく史学一般を扱う雑誌でも、日本を扱うことを明示しない「古代国家の形成」「中世の地域社会」「産業革命の展開（！）」といったタイトルが許されるのだ。

またわれわれは、「日本人が日本史をよりよく理解する」ためにのみ「日本史の国際化」を推進する善意の日本史研究者に、日本がアジア史と世界史で果たした重要な役割と日本史学界の高度な研究水準は、「世界がアジア史と世界史をよりよく理解するために日本史をそこに位置づける」ことを強く要求しているのだと指摘し、そのための海外発信をうながす。今や海外でも日本史研究者は日本語が読めるのが当たり前だが、アジア史やグローバルヒストリーの刷新のためには、とりあえず（海外の研究者の力を借りる方法も含めて）英語で発信する必要がある。日本史・西洋史に圧倒的に偏った日本の史学界では理解されにくい、アジアを見回せば下手な英語で敢然（平然）と発信して、内容の良さで国際的に認められている学者はいくらでもある。

桃木至朗（ももき・しろう）

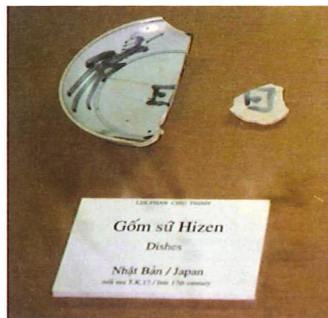
1955年横浜生まれ。京都大学文学研究科博士課程中退。大阪大学文学研究科教授（東洋史学）。専門はベトナムを中心とする東南アジア史・海域アジア史、東南アジア地域研究などで、1993年から現在まで「海域アジア史研究会」代表。著書に『歴史世界としての東南アジア』（山川世界史リブレット、1996年）、『岩波講座東南アジア史別巻 東南アジア史研究案内』（共編著、2003年）、論文にDai Viet and the South-China Sea Trade from the 10th to the 15th Century, Crossroads 12(1), 1999. など。

われわれはまた、世界の歴史学について、「アジア史専門家（数からして少数）はヨーロッパ史のこともある程度知らざるをえないが、ヨーロッパ史専門家（絶対数が多い）はアジアのことをほとんどにも知らなくてすむ」という非対称な関係を——欧米人はもちろん日本人でさえ——当然としてきた近代知のあり方を批判する。同時に、オリエンタリズムの「裏返し」としてアジアの特定地域の中心性・先進性を過度に強調する傾向（中国、イスラーム、中央ユーラシアなどそれぞれに見られる）にも反対する。これらを変えなければ、広い範囲を扱うのに不慣れた学界の至る所で生じているズレや倒錯は解決できない。大多数の男性研究者が「ジェンダーどこ吹く風」という態度をとっていることを批判する点で全面的に正しい日本のジェンダー史研究者たちが、「欧米（と日本）だけで《世界》を語り、アジアについては客体・被害者としての側面しか見ない」旧弊な知の枠組（男性が世界を支配するために作った）から自由でないのは、その残念な一例である。

これを読んで「空理空論」だと眉をひそめているそのあなた、あなたが世界のトッププロだったら、どうぞ自分の学問を下さい。それを「役に立たない」などと切り捨てるようでは、日本は先進国とも文化国家とも言えません。でも世界トップレベルでないなら、われわれの班に参加して、業界全体の状況を把握し、わかりやすい解説や他流試合もできるように系統的訓練を積むことをお勧めしますね。



第2回全国高校歴史教育研究会「世界史と日本史の対話」（2004年8月）



日本町があったベトナム・ホイアンで発見された1670年代の伊万里焼の破片。鎖国から30年以上後に、どのようにして運ばれたのだろうか。

フィガロはなぜ理髪師にして「街のなんでも屋」なのか？

伊東信宏

ロッシーニのオペラ《セビリアの理髪師》の物語は、モーツアルトの《フィガロの結婚》の歴史ともいえるものだが、その冒頭近くでフィガロは「俺は街のなんでも屋」と歌う。おや？と思われたことはないだろうか。フィガロはタイトルにもあるとおり「理髪師」ではないのか？ 実際のところ、フィガロは理髪師であり、かつなんでも屋でもあるのだが、しかしそれにしてもどこでこの二つの商売はつながるのか。そして、なぜフィガロはその「理髪師兼なんでも屋」でなければならぬのか？

そのヒントとなる記述が、クロディヌ・ファールヴァアサス著『豚の文化史』（宇京頼三訳、柏書房、二〇〇〇年）という書物に出て来る。それによると、鍵は「豚の去勢師」という商売にあったようだ。理髪師に、なんでも屋に、去勢師？ いよいよ話がややこしくなるので、順を追って説明してみよう。（以下、引用は全て『豚の文化史』からであり訳書のページ数のみ記す。）

まず、豚の去勢師とは何か。これは文字通り、豚を去勢する商売である。豚を去勢する、という仕事は、年中必要なわけではない。しかしまた、誰でもがそんなことをできるわけではない。それは専門的な知識と技術を必要とする仕事であり、「その技能を確実に習得するには三世代必要であるとされている。」（32頁）それゆえに、彼らは村々を巡って仕事を請け負う移動職人の一種だった。

だが、それだけではない。彼らは単なる職人の域を超えて、パフォーマー的な側面を持っていた。そもそも彼らの

外見は、とても目立つものだったという。「プロの去勢師は自分が目立つよう赤い上着を着る。」（32頁）あるいは赤い帽子やベルトを身につけ、そして自分の到着を村人に知らせるための小さな笛（何本かの長さのことなる管を並べたバン・フルート状の笛）を持っていた。

「村はまず、彼らの職を示すアルペジオで到来を知らされると、ドアが開き、古老は入口に留まるが、他の者は彼らの魅力に捕らわれて、その後列をなしてついてゆく。彼らは奉納祭の楽師や昔の仲人役のように「街頭行進」の先頭に立つ。次いで、彼らは豚の性を確定し、そして笛の力により、その奔放さを減じて、豚を家に同調させる（つまり去勢手術を行う。）」（37頁）

さて、この豚の去勢師の技術は、ときとして人間にも適用された。主に子供が、彼らの手によって去勢されたり、ヘルニア切除といった簡単な外科手術を施されたりしていたようだ。この種の「大道医者」（とは近代的な医学の観点からすれば衝撃的な言葉だが、実際にそのような存在はかなり幅を利かせていたらしい）から「理髪師」への距離はそう遠くない。現代の理髪店の前で回っている赤と青の飾りは、理髪師が「外科医」であった時代の名残であり、赤と青の螺旋は動脈と静脈に由来するのだ、という説明はよく知られていると思われるが、この「外科医」こそ、去勢師がしばしば兼ねた「大道医者」「瀉血師」の類であった。

この去勢師＝大道医者＝理髪師はまた、しばしばイタリアの大衆演劇の登場人物でもあった。十五世紀イタリアに

伊東信宏（いとう・のぶひろ）

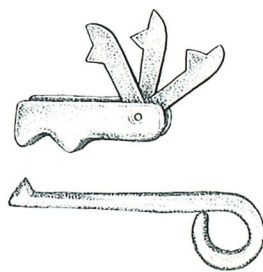
1960年京都市生まれ。大阪大学文学部、同大学院修了後、リスト音楽院（ハンガリー）などに留学。大阪大学大学院文学研究科助教授（音楽学）。東欧の音楽史、民族音楽学を専攻。著書に『ハルトーク』（中公新書、1997年）、『ハイドンのエステルハーゼ・ソナタを読む』（春秋社、2003年）。論文に『民族の音楽／音楽の民族：コダーイ、クンデラ、そしてモルドヴァのファンファーレ』（大津留厚編『民族』、ミネルヴァ書房、2003年、pp.181-216）など。

おける「ノルチーノ」と呼ばれる喜劇ジャンルは、この去勢師を主役とする。ノルチーノという言葉は、ウンブリア地方のノルチーアという村から来ているが、この村出身の豚の屠殺者ないし去勢師のことを指し、後には出自とは関係なく「去勢師」一般のことを指すようになった。舞台でのノルチーノは「その役目がよく分かるように大きな庖丁を手にし、『豚の去勢師』の衣装で登場した。」(99頁)ここにいたって、去勢師＝理髪師は劇の舞台に現れる。そして、そこで大衆演劇における道化のもう一つの類型、すなわち秩序を攪乱することによって、様々なトラブルを巻き起こしながら、それを即興と機知で切り抜けてゆくアルレッキーノ的存在(それは職業と土地に縛り付けられた民衆からすれば、「なんでも屋」だった)と融合してゆくことになる。

このようにして、十八世紀のフランス人、ボーマルシェが書いた《フィガロ》や《セビリア》における「理髪師＝なんでも屋」という人物類型の遠い淵源は(それがどの程度意識されていたかは別として)、喜劇ジャンル「ノルチーノ」を通じて、笛を吹きながら村にやってくる去勢師へと繋がっていたと想像してみることができる。通常、高級なものとされているオペラのような芸術と、豚の去勢といったもつとも即物的・実地的な民俗文化とが交錯するような視角——私が「モダニズムと中東欧の藝術・文化」と呼ばれる研究グループの片隅で見いだしたいと思っているのはそんな視角である。



豚の去勢師：P. ルデュエール『トゥルーズ地方の生活絵図帖、1796-1884』所収



19世紀後半に使われていた演血用の器具
(Magyar néprajzi lexikon, Akadémiai Kiadó, 1987所収)

《編集後記》

ニューズレターInterface Humanitiesは、今回お届けする第7号が最終号になります。大型研究プロジェクトの場合、その研究の成果は、Web上で機動的に紹介していくのが、IT技術の進展した現代にふさわしいのかもしれませんが、ニューズレターのような紙媒体による広報誌は、速度からいえばきわめてスローなメディアです。私たちは、しかし、このスローさをむしろ武器にして、紙媒体ならではの誌面づくりに取り組んできました。それは、たんなる宣伝広報にとどまらないモノづくりの作業であり、その製作過程じたいさまざまな執筆者、編集者、デザイナー、印刷・製本家が力を合わせるインターフェイスの場であったと思います。ここで獲得された経験をもとに、人文学のさらなる未来を望んでいきたい — そんな希望をいただきつつ、これまでご協力いただいた皆さま方に心から御礼申し上げます。(M)

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」ニューズレター
Interface Humanities 07

発行=「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
編集長=三谷研爾
編集=金水 敏 メディアラボ
ロゴデザイン=奥村昭夫
編集協力・取材=彩都メディアラボ株式会社
デザイン・レイアウト=井垣明子
印刷=岡村印刷工業株式会社

発行日=2006年11月1日

連絡先=〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文学」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax : 06-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities 07

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Satoshi KINSUI, MediaLab
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Graphic Designer: Akiko IGAKI
Printed by Okamura Printing Industries Co., Ltd.

Published on November 1, 2006

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

